



明石通信



付録

発行責任者 明石洋子

2004年1月1日発行

あけましておめでとうございます

昨年は、1月18日のNPO法人トマトの講演会(埼玉)からスタートし、12月20日の都立南大沢学園養護学校の講演会まで、何十回講演をしたでしょうか。北は北海道から南は沖縄県石垣島まで、沖縄県糸満市での講演会などは日帰りでした。初めて行った出雲、松江、富山、名古屋、津、高松、平泉、また毎年呼んでくださる北海道や福岡、近県に至るまで、全国各地の皆さんとお会いでき、行く度に強固な、また新たな、「人のネットワーク」ができ、エネルギーと支援を頂いて、「人は財産」をいっそう強く心に刻んでおります。

今年は、行政(自治体)からの講演依頼も多く、「公務員から心のバリアフリー(差別偏見の解消)を」と願っている私としては、理解の輪が広がるよう頑張りました。「本を読むのとまた違って、親の熱い思いが伝わり、とても素晴らしい講演でした」とのこと。公務員仲間に徹之の理解者が増えて心強いです。「能力が無い、故に役に立たない」と思われてしまう(残念ながら現実です)知的障害者が、屈辱感を味わう事なく、人としての尊厳を認めもらうためには、誰かが実践して見本(人という支援あつての共生、本人はそのままでも、周りの受け止め方が変われば可能という例)を示さなければ、合意も共感も得ることはできないのは残念です。異質なものを排除し、知的障害者を下に見る、日本社会では、障害を持って生きていくには、まだまだ壁は厚く、シンクロ(スイミング)のように、水面上の笑顔の下には、沈まないように手足を盛んに動かす努力が必要のようです。権利と共感を両輪として地域社会で生きるのは、「前例が無い、では前例になればいい」を実践した徹之にとって、まだまだ人一倍頑張らないと、沈んでしまいそうな毎日です。



出会いふれあい、理解しあって初めて意識改革は可能のようで、私がある日突然障害児の母になったように、「誰でもいつでも、障害者になる、また家族に障害者が存在することがある」という認識にたてば、優しい眼差しになるのでしょうか。障害者に優しい街は誰にでも優しいのです。

「ノーマライゼーション(特別視せずあたり前に)の定着は、心のバリアフリーから」ですね。今年はこの内容で、大学の同窓会総会や、病院薬剤師会の薬局長研修会で講演しました。そうそう立教大学の非常勤講師にもなって、全学共通カリキュラムでいろんな学部の学生さん達に講義しました。(立教大学のHP「大学案内」にも載りましたよ)

徹之の母になったおかげで日本各地に出かけ、いろいろな経験をさせてもらっています。

また、今年は、全国規模の「アメニティフォーラムインしが」(天津プリンスホテル)や「全国知的障害者関係施設職員研究大会」(幕張メッセ)などにも講演やシンポジストに呼ばれ、知事さんや厚生

労働省のお役人や大学教授等と同席の機会を得、多くの福祉の最新情報を教えていただきとても勉強になった1年でした。

(ちょっとハードスケジュールで、「ありのままの子育て」(2002年7月発行)「自立への子育て」(2003年2月発行)に続く第3巻の執筆は延び延びになってしまいました。今年は必ず発行します。)

徹之も、各地で皆様に温かく受け入れられ、「認められている」ことを実感し(特に年齢に近い若いお母さん方が希望いっぱいの尊敬のまなざしをくださって)、自尊心(誇り)を回復し、仕事も生活もプラス思考で頑張っています。

11月の全日本育成会の全国大会で、私は「健康で生き生きとした暮らし」の基調講演をしました。その中で、「障害を持っていても、豊かに人生を暮らせるためには、社会との交流を図り、何らかの役割を持つこと」が大切で、「人生に前向きに取り組む姿勢が健康にも影響を与える」とお話しましたが、事実、徹之はストレス解消をお酒に頼るのを止め、休日は私と講演の旅に出かけて、人間としての尊厳と自信を回復し、体も心もフレッシュしたようです。最高のストレス対策は、だらだらと過ごすのではなく、旅行等趣味やスポーツをするのが健康で積極的な休養となります。心を切り替える機会として、去年は意識して徹之と一緒に日本各地を旅しました。北海道では、親御さんも一緒に、最高に美しい紅葉の中、講演と観光のツアーです。各地で大歓迎を受け、皆様から「ありのままに」受け入れてもらい、徹之は「あ～あ、な～るほど」を連発しながら、穏やかな人間関係を構築し、また今年も(来年も)講演を頼まれました。徹之共々今から楽しみにしております。



(昨年の講演会のいくつかの講演内容や新聞記事や感想を別記しました)

ところで皆様からの質問が多い、徹之の「結婚頑張ります」の実現は…まだです。「本人の思いを尊重する」をモットーの私でも、こればかりは、相手があることですし、結婚のイメージがつかめず、プログラムがつかれません。結婚支援は親でなく第三者支援でないとうまく行かないといわれ、サポートセンターに委ねたいと思っていますが、まだまだです。でも先日「なんで相手を障害者の女性と決めているのですか?」と聞かれ、絶句しました。普通の若い女性が徹之のお嫁さんになってくれるなんて考えていませんでしたから。私こそ、障害者感を変えなくてはいけないのです。それなら第三者(他人)のサポートを必要としない?…「目から鱗」です。



地域で育ち、可能なかぎり豊富にした選択肢から、自分の生き方を自分で決めた(「自己決定」)徹之ですが、「定時制高校も清掃局も徹之君の希望ではないのではないか」と思っている方もいるそうです。間違いなく、徹之の希望ですよ。彼が「思いを表すことができる」ように育ち(自主性や主体性を育むことを子育ての方針にしましたから)、自分で自分の道を決め(前例の無いことですから、厚い壁が立ちふさがって、親にとっては、それこそ大変でした)、その熱い思いが、彼の周りの人々を動かし、皆を支援者にして、不可能を可能にしてきました。

先日(12月6日7日)徹之と一緒に岡山講演に行った時、徹之はNHK岡山とRSK山陽放送局に行きたがりました。6日に、NHKは石田浩光さんの案内で十分見学させていただきましたが、RSKは「翌日の岡山ハーフマラソンの中継準備で大変」とかで、断られました。それでも建物に入りたがった徹之は、6日に断られたにもめげず翌7日も講演の合間にボランティアさんと2回もRSKを訪ねたそうです。

それでも見学できず、あきらめきれない彼は、「外回りします」と建物の写真を何枚も撮ってきました。徹之は、本のサインにも自分の名前より「RSK」と書き、いたずら書きの絵にも、「RSK(山陽放送)」と、書いて「徹之はRSKの見学をしたいです」とアピールしています。

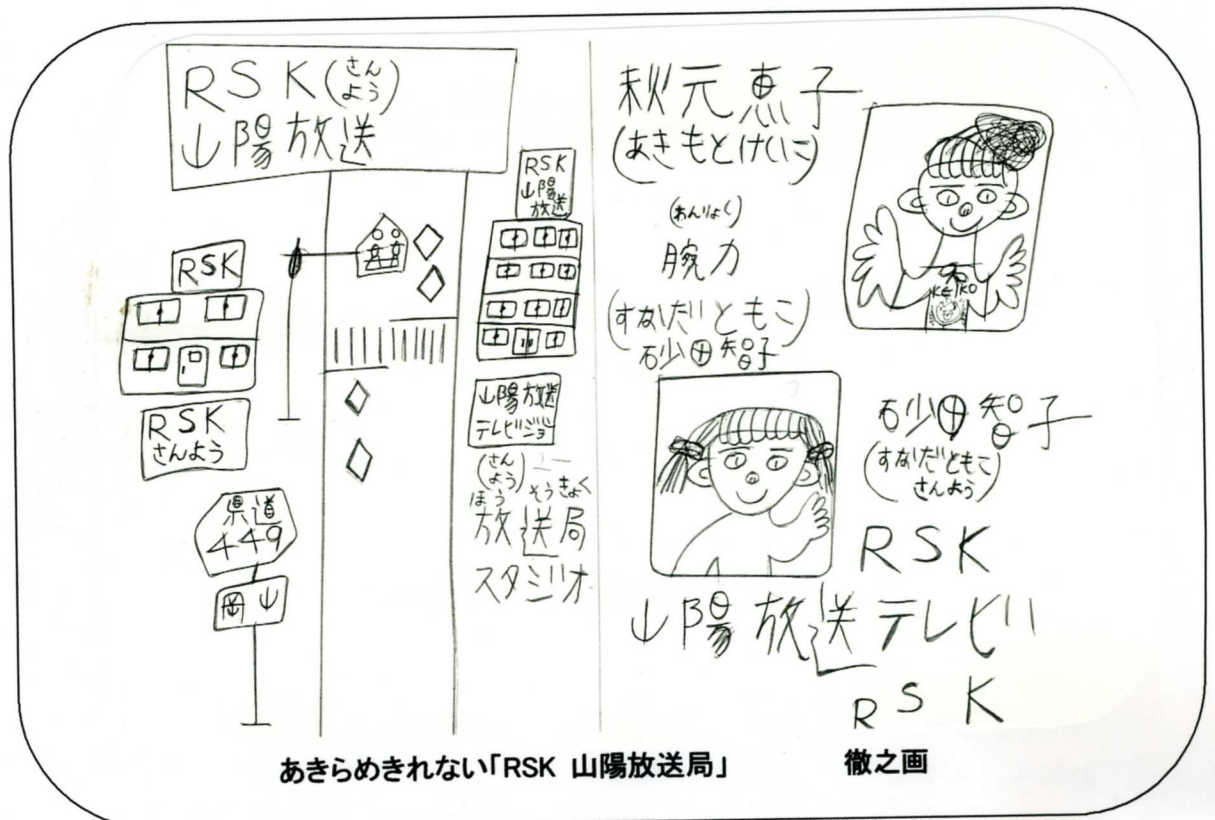


岡山の皆様は、岡山滞在中の徹之のそのようなアピールを見て、私たちが川崎に帰った後、各自がいろいろな方法で、RSKに交渉されたようで「見学OK」をもらってくれました。

岡山に行くのはまだ先になりますが、「RSK見学」という、今徹之が一番希望している楽しみが、今年はきっと叶うことでしょう。3回もチャレンジしてできなかった徹之の思いを叶えてあげたいという、岡山の皆様のお気持ちがとてもありがたく嬉しいです。

本人の思いがあるから、周りも支援できるのです。子育てで一番大切な事は「思いを育てること」ですね。

「自分らしく生きる」とは、「自分は何をしたいか、どう生きたいか」ですもの。



あきらめきれない「RSK 山陽放送局」

徹之画

さて、昨年4月より、障害者の自己決定を尊重し、利用者本位のサービス提供を基本とする「支援費制度」がスタートしました。障害者自身が必要なサービスを主体的に選び、事業者と「契約」して利用するのです。今までの福祉は、施設「ハコモノ」重視で、採算の取れない地域「サービス」をする事業者など皆無でした。

それで「地域の中で共に」を実践し続けたあおぞら共生会の親たちは、平成元年に地域作業所「あおぞらハウス」を「就労の拠点」として設立し、更には平成10年に「地域生活支援の拠点」として、自助努力をしながら「NPO 法人サポートセンターあおぞらの街」を立ち上げ、平成13年末には社会福祉法人の認可を得、「支援費制度」の事業者となりました。



入所施設づくりに奔走していた20数年前、「ノーマライゼーション」の思想を専門家から教えてもらった時は、まさに「目から鱗」でした。「施設に入れてよかった」ではなく、いつか「障害があっても地域で当たり前生きていいんだよ」の時代がきっと日本にも来ると信じて、厚い壁にもめげず「地域の中で」にこだわってきました。徹之の思いを最大限に尊重して、教育も就労も生活も、本人を知って、理解して、支えてくれる「支援者」と「選択肢」を少しでも多くと願って運動してきました。

やっと「施設から地域へ」と流れが変わり、「地域社会の中で在宅で暮らせるように支援する方針」を国が決めました。この「支援費制度」が日本の福祉に於いて、新しい理念と方策を生み出してくれると、期待しています。支援費制度が目指す「その人らしい、自立した生活を支える」という理念が実現されるよう、地域生活支援の充実を図る方策を、社会福祉法人「あおぞら共生会」と共に、考えていきたいと思えます。明石邦彦理事長が機関紙「あおぞら」に法人の目指す方向を書いていますので、お読みください(創刊号～第3号発行)。私たち親亡き後も、徹之がこの住み慣れた地域で、充実した幸せな人生を送ることが、私たちの勤めだと思っています。(もちろん社会人になった次男政嗣も、自分らしい幸せな人生を送ってくれることを願っています。)

特に、障害者とそうでない人が、地域の中で共に生活できるシステムとして、また社会とつながりステップアップするためには「地域福祉コミュニティ構想」(住民との共同作業と位置付けて)が必要と考え、更に支援を受けながらも「社会のお役に立ちたい」と考えている障害者(チャレンジド)の誇りを大切に、納税者となれるよう「働く場」の拡大を願って、今年はこれらの具体的な方策を提案し、実現のために運動していきたいと思っています。「どこに住み、どこで働き、誰が支えるか」は、「地域に住み、地域で働き、地域の皆が支える」ですね。特別な場で特別な人の支援では、本人のQOL(生活の質)は向上しません。社会活動に堂々と「参加する権利」が保障されたのです。親以上に幸せな人生を送って欲しいです。

地域の皆様どうぞよろしく。「障害者が隣に住んでも当たり前、隣で働いても当たり前」と、皆が温かく迎えてくれるような、そのような日が1日でも早く来ることを願っています。

本年もどうぞよろしくお願ひします。



明石洋子